

四旬節第5主日 (ヨハネ 11:1-45)

その石を取りのけなさい



最近、歳を取ったと感ずることがあります。もう二ヶ月くらい前から、「あー、私は転勤しますって、言わないといけないんだな」と思って、皆さんの顔をまともに見ることができなくなっていました。もっと若い頃は、「知らない教会に巡礼気分で行く」そんな感覚でしたが、今は「これから田平教会の家族がまた、知らない神父様と時間をかけて関係を築き上げないといけないんだな」みたいに、家族を残していく感覚があります。

四旬節第5主日A年は、ラザロの死と、イエスがラザロを生き返らせる場面です。私はイエスの一つのことばを皆さんと分かち合いたいと思います。これも年の功でしょうか、新鮮な学びがありましたので分かち合わせてください。

イエスの一つのことば、それは今週のヨハネ福音書 11章 39節「その石を取りのけなさい」です。もう7年も皆さんと一緒に居るので、ただ単にお墓を閉めている蓋の石を取りのけなさいと言ったわけではないだろうな、ということはお分かりでしょう。

そこで、何を「取りのけなさい」と言っておられるのかを考えましょう。中田神父は、皆さんの身近なところに理解の鍵があると思っています。たとえば、夫婦で考えを伝えようとするときに、「これを言ったら機嫌悪くするから、言うのをやめようかなあ」とためらうことがないでしょうか。もうすでに諦めて言わなくなっているかも知れません。

その、「ためらい」はイエスが言っておられる「石」であり、「その石を取りのけなさい」と指摘される部分です。「石」を置いた人がいるし、「石」に遮られている人がいます。両方に、イエスは「その石を取りのけなさい」と言おうとしているのです。

ラザロの墓の前にあった「石」は、生きている人と死んでいる人とを分け隔てる「石」でした。そして死んだラザロの姉妹マルタが、「主よ、四日もたっていますから、もうにおいます」(11・39)と言ったように、もはやどうすることもできないもの、諦めと無力感を表していました。

そのすべてに、イエスは答えます。「その石を取りのけなさい」生きている人と死んでいる人を分けるのは石の蓋ではないことを証明するために、イエスは答えてくださったのです。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。」(11・25)

これは私たちに、次のように当てはめることができるでしょう。夫婦が生き生きとしているのは互いの力関係ではない。家族が生き生きとしているのも、親のおかげだけではない。イエス・キリストが夫婦、家族の中で恵みを注いでくださるおかげ。イエスがいつでも自由に恵みを届けられるように、「その石を取りのけなさい」そう呼びかけているのです。

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

私は、イエスの呼びかけに応えるでしょうか。イエスは障壁となるすべてを取りのけて、喜びを届けてくださいます。喜びを受け取れるか否かは、私たちが石を取り除くか否かにかかっています。これからイエスは聖なる三日間を経て復活の栄光に入られます。復活のイエスを迎え入れるために、あなたの中にある石を取りのけますか、取りのけませんか？運命を左右する二週間です。

今年も、何とかして受難の主日までには、御復活までの説教案を用意したいと思っています。今回は紙の印刷はしません。とてもその時間がありません。代わりに、**QR**コードを用意しますので、それをカメラで読み取って、参加していただければと思います。聖なる三日間に参加できない方も、ぜひ先に用意する説教案で、救い主の歩みを一緒に辿っていくことにしましょう。

受難の主日(マタイ 27:11-54)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。